

# 觀心の法門

遠藤是妙

佛教學に於て初學者を惱ますものゝ一つは、所謂専門語即ち術語であつて、而かも其の名其の言葉が同一でありながら、その時代や宗義によつて、各内容説明等を異にするといふことである。其れは他の哲學や科學以上に困ることゝで、一語の認識を欠くことによりて、教義全體の不明を來し、一句の誤解によりて、教義全般の領解を謬ることになるのみならず、聖教の價值批判にまで多大の影響を及ぼす恐れがあると思ふ。吾等は偶々一篇の學的論文を讀み、一席の専門講演を聽く時、よくそれを實感することである。今の觀心の語も教相に對するので、教相は佛一代の教法說相と其れによりて詮顯せらるゝ教理であり、觀心はその教相又は其れによりて理解したまゝを、自分の心に取入れて觀察し、實際の修行に移さるゝものなるが故に、この二つの意味のものは、佛教であるかぎり、何れの宗義にもあるわけである。例せば法相の三時教判に對する五重唯識觀の如き、華嚴の五教十宗判に對する唯心法界觀の如き、眞言の教相に對する事相の如き、淨土宗の教相に對する安心起行の如き皆それである。然し未だ天台宗の如き整備せる教相及び觀心はない、即ち五時八教を以て佛一代の聖教を判釋し、法華開顯の教理を證明するを教相となし、この教意によりて一心三觀十境十乘の方法を設け、行者陰妄の己心を觀じて三千三諦の理を顯はすを觀心とするのである。故に

教相と觀心とは天台宗の二大教義にして、教相解を開くは觀心の豫備知識となり、觀心行を立つるは教相の實際化なれば、兩者一方を缺き一方に偏することは出来ない、所謂教觀相資と稱して、天台一家の讀稱するところである。されば三大部に於ても玄義・文句の教相を述ぶる處に觀心あり、止觀の正しく觀心を示す前にも教相を廢しない、但し各部の正意より教觀の傍正を判すれども、天台宗としての本當の目的は觀心にあるのである。それは教相も所詮觀心の爲めであるから、觀心が家の教相でなければ、遂に經釋の文字だけに止まつて、何等効果も利益も正覺も得られないことになる。この邊から觀心証道の實義とも云はるゝのである。

要するに觀心は一般の佛教に通ずる意味を有ちながら、茲に云ふ觀心は天台の觀心でその教相を離れざる實際的修觀方法と心得べきである。

## 二

更に天台の教相に屬すべき玄義に用ゆる觀心は、領解すべき法相を心の上に持て來て觀るのだから、名玄義でも、體玄義でも、乃至は三諦でも四諦でも、此等の法相に附して明す所の觀心であるから、これを附法觀と稱するのである。文句に用ゆる觀心釋は、法華經の中に顯はれて來る事物、例へば大舍城とか香閻窟山とか云へる物に托して觀心を釋するのであるから、これを托事觀と稱するのである。然し此等の觀心は、客觀的の法相事物を主觀の内に入れて、領解し易からしむる最上の方法と見るべきである。故に修行として釋する場合もあれば、法門として解釋することもあれば、觀境として解釋する時もあつて、觀心を正意とする止觀の如く、終始一貫觀境を定めて、専ら三觀十乘の修行方法を説くのは、其の内容を異にすること明かである。この止觀の觀心を縱行觀又は約行觀と稱するのであ

る。又人に依つて其の行相を異にする邊から、南岳大師の傳へたる三種の止觀、即ち漸次・不定・圓頓あれども、今の摩訶止觀に説く所は、直に法華圓頓の理を修証する圓頓止觀なのである。

### 三

以上述べたる如く觀心は修行方法には相違ないが、吾が己心を觀して法華圓頓の理を証するに於るのだから、觀心こそ本迹所詮の法體を顯はすものと見るべきである。この意味に於て觀心は究竟の極理でもあり、至極の絶妙とも名け得るのである。故に玄義二ノ上五十七には

今大教〔門〕若起レバ方便ノ前〔全〕教ニ今本地ノ教興レバ迹中ノ大教即絶ス今入レテ觀ニ妙寂ナレハ言語道斷本ノ教即絶ス絶ハ由ニ於觀ニ將ニ此ノ絶ノ名ニ於觀妙ニ

と述べて、昔・迹・本・觀四重の興廢を明かにし、本迹遠近の化用も法華開顯の教理も、これを自己の心性に引入れて觀するとき、始めて其の機能を顯はすものであると示されて居る。此の下に荊溪の

故ニ知ス徒ニ引クハ遠近ニ未レ了ニ觀心ヲ遠近ハ自レ彼於レテ我ニ何カ爲シ如シト貧ニ數ニ寶ヲ此ノ謂也

と註せるもの、又至極御道理と感ずる次第である。茲に於てか觀心は元より修行ではあるが、所用の法門から見れば、本迹を超越したる能絶の大教とも見ることが出来るのである。言ひ換へれば觀心は教相を活かす道であるとも云へる。是は玄義の一段に過ぎないが、専ら觀心を明す止觀に於ても、全十卷の内前四卷、全十章の内前六章の間は、正修・止觀の用意方便として、教相教理を開演し、立行の土臺を築かれて居る。されば、天台觀心の内容も亦法華圓頓の教理にして、天台大師之を修し又之を証し、行者の爲めに修証の道を示されたのである。然し天台の証せられた法

華經の眞理は、諸法實相を出でない、即ち三千諸法の一つなる吾が己心を觀境と定めて、三千の諸法もこの心性の本具であり、實相の理體も即空假中であると顯はすにある。これが法華所詮の妙體であり、佛の如實に知見し玉ふ所である。故に章安大師は止觀の序に（一ノ一廿七）

此之止觀、天台智者說三心中所行ノ法門

と云ひ、荊溪大師も亦輔行（止觀五ノ三廿左）に

乃<sub>チ</sub>是<sub>レ</sub>終窮究竟ノ極說

と云ふ。即ち天台至極の法門であり、觀心所行の法體と云はねばならぬ。

四

次に吾が日蓮宗の觀心は何うであるか、これを鮮明にしなければならぬ、吾祖が當身の大事として、御撰述遊ばされたる觀心本尊鈔（九二八）の如き、而かも其の副狀（九五七）には

觀心ノ法門少々注<sub>レ</sub>之乃至此事日蓮當身ノ大事也

と遊ばされ、其他授職灌頂鈔（一〇二九）、總勘文鈔（一九〇七）、十法界鈔（二八九、二九〇）等隨處に觀心の語を御用ひになられて居らる。惟ふに觀心の語は天台の其れを襲用せられたとしても、其の内容法體等大に異なるのである。吾宗に於て觀心と云ふも修行の方法たる意味に相違はないが、十界事常の御本尊を境體として、一心に南無妙法蓮華經を唱ふれば、無始以來三法（本佛と本法と吾）一體の妙旨が、自然に顯現する處に、其の行相の碩異を認めねばならぬ。是を事行の妙觀とも、本化の信行とも名くるので、觀心の語には相應しない様であるが、天台の觀慧の代りに信念を

以てし、心性本具三千三諦の代りに、事相常住已心本尊を以て境體としたのであるから、天台の一念三千觀理境結成の文を會して、吾祖の信念唱題已心本尊の妙境を成したことになる。是が即ち觀心本尊（九二八）であり、壽量品の觀心（二〇二九）であり、受持讓與（九三八）の行相であり、但信唱題當體蓮華佛（九九一）の修証である。故に吾宗の觀心は、信者の心構へとも安心立行とも見ることが出来るのである。然らば斯うした吾宗の觀心は、何によりて立てられたか、端的に云はゞ觀心の法體は何であるか。申す迄もなく天台が述門方便品の眞理實相を法華の所詮觀心の法體とするに反し、本門壽量品の文底に於ける三法一體の妙旨を吾宗觀心の法體とするのである。この法體を顯す前提として、壽量品顯本の次第を考ふるに、天台は壽量品の文の如く、伽耶近成歴史的佛陀の本時は、五百千萬億塵點の昔にあると顯はすが故に尙ほ有限始覺の遠壽であるから、佛の價値に高下なく、所証の境界亦迹の理實相と變りがない。然るに吾祖は、この壽量品の文の奥底を徹見して、五百塵點は無始顯本の一過程は過ぎない、是の故に壽量品の教相は、佛の無始久遠を顯はしたものであるとするのである。隨て所化の衆生も無始本有でなければならぬ、茲に始めて述門始覺の十界互具は、其儘本覺本有の十界互具となつた道理であるから、佛界にも無始の九界を具し、九界にも無始の佛界を具することになる。是を天台の文上隨他の本門に對して、文底隨自の本門と稱するのである。この本門の觀心は、南無妙法蓮華經の一心に於て、吾等凡夫の一心と如來の一心と、其儘一つであると顯はすにある。其はこの七字の題目が、因果俱時生佛同體であり極理であり心であり、本佛所証の本法であつて、三法一體の妙旨も、十界三千事常住の當相（四十五字の法體）も、皆是の七字の展開又は變相に過ぎないからである。

若し十法界鈔（二九〇）四重興廢の一段に於て、本門と觀心と其の教體を分別するときは、本門は能入の教門なるが故に、隨自本門即ち壽量品文底の教相と見るべく、觀心は所到の妙處なるが故に、本有の妙法蓮華經の當體と見るべ

きである、所謂本尊鈔(九四二)に於ける本法三段(又は觀心三段とも云ふ)の正宗分の法體、又は内証の壽量品と稱するものであらふ。但し教觀元より二にして不二なるものなるが故は、永く別ならざる事は云ふ迄もない。

## 五

觀心の大教とか、五重相對の教觀の觀とか、觀心の法門とか仰せになられたことは、本化別頭の觀心を顯はす上に於て、最も意義深いことと拜するのである。而かも其れを當身の大事となされたことは、本佛の因果と悟道と慈悲と事業とを、其儘末法の吾祖の身の上の事とされたからである。即ち法華經の行者としての體驗から、末法の弘通は益々如説の行法(棲神廿一號一八)で進まねばならぬと信じられたからである。要するに行に活かし得ぬ教法は魂のぬけた死物に等しいものであるとの思召を以て、獅子王の如く要法の行を唱導遊ばされたのである。末法今時特に教家の活動を要する時、如説修行鈔の如き信念を以て、觀心本尊鈔の如き、吾祖が己心中所行の法門を、吾等が己心の所行として、廣宣流布の願行に精進せねばならぬ。